

イエスの道備えをする洗礼者ヨハネは、母の胎にある時からイエスに伴走していた。イエスの母マリアに受胎告知をする天使ガブリエルは、その前にヨハネの父ザカリアに現れる。

「すると、主の天使が現れ、香壇の右に立った。ザカリアはそれを見て不安になり、恐怖の念に襲われた(ルカ 1:11~12)」。天使の顕現は、ザカリアと民の祈りへの答えであった(1:10,13)。

天使の第一声は「恐れることはない(1:13)」。御声を聞くために人は、自らの「恐れ」から解放されねばならない。ザカリアに限らず、マリアも(1:30)、羊飼いかも(2:10)同じだ。

神的な存在と向かい合うことは誰だって恐ろしいが、恐れフィルターを外して聞く神の御声は、意識の届かない私たちの深みを、緩やかに、力強く揺さぶる。

「ザカリア(1:13)」と名を呼ばれ、天使は「わたしはガブリエル、神の前に立つ者(1:19)」と自らの名を名乗っている。この「名」と「名」の出会いが印象的だ。

「名」とは、いわばその人の本質で、名が知られることは「危険」であるため、よほど信頼しなければ本名を明かすことはなかった。だが天使は自分の名を明かし、ザカリアに己を開いた。

神との信頼関係は、神の先手によって実現する。

「あなたの妻エリサベトは男の子を産む。その子をヨハネと名付けなさい(1:13)」。「ヨハネ」とはザカリアの家系名ではないが(1:59~61)、天使がそう命じた。通常、命名権は父にあるが(1:62)、ヨハネの場合は、イエスと同じく(1:31)天使が決めた。

これらの名にどういう意味があるのか。ヨハネ(ヨハナ)やイエス(イシュア)はヘブライ男子の一般名であり、世の日常に神の救いがある、という隠喩なのか。

名を呼ばれ、「私」の本質が掴まれるのは、祭司ザカリア(1:13)や母マリア(1:30)といった特別な人に限らない。

「羊飼いかは自分の羊の名を呼んで連れ出す(ヨハネ 10:3)」。私たちは羊飼いかキリストに名を呼ばれ、連れ出され、ここで「キリストの体」とされている。

「私の存在」の深みまで知られ、まぎれもなく「私の名」が呼ばれ、欠け多い「私のまま」愛され、赦され、認められ、救われている。

私たちが今ここで礼拝を献げている現実には、「呼ばれた私」としてすでに神と向かいあっているから。

イエスの母は「マリア、恐れることはない(ルカ 1:30)」と言われた場で、「お言葉どおり、この身に成りますように(1:38)」と答えている。ヨハネの父は「恐れることはない。ザカリア(1:13)」と呼ばれ、その恵みに応えるまで(1:63~64)、五カ月を要した(1:24,57)。

つまり、一人ひとりの名が違うように恵みへの応じ方は千差万別なのだ。だから、「私」として、「あなた」として神の愛に答えてほしい。

「見よ、わたしは使者を送る。彼はわが前に道を備える。あなたたちが待望している主は、突如、その聖所に来られる(マラキ 3:1)」。預言に従って、キリスト降誕の道備えとしてヨハネは生まれた(ルカ 1:17)。

ヨハネは禁欲的な厳しい調子で現れるが(3:7~9)、その根底は「喜び」。ヨハネの誕生はザカリア一族の喜びに留まらず、民全体の、世の喜びであった(1:14)。キリストの道備えをするという栄光だ。

「あなたたちが喜びとしている契約の使者。見よ、彼が来る、と万軍の主は言われる(マラキ 3:1)」。きつい現実も(3:2)、究極的には喜び(3:1)。私たちの恐れを打ち砕く、恵みの呼びかけなのだ(ルカ 1:13)。



#### 《おまけのひとこと》

優しいイエスの道備えをしているのが厳しい洗礼者ヨハネ 厳しさを迂回して優しさに辿り着くと二人が並んで立っているのではないか 背格好も慎ましさも変わらない どちらが救い主なのやら